

---

# 保育所実習指導Ⅱにおける 役割分担に基づいた模擬保育を通した学び(2)

酒井 基宏・藤川 志つ子・石川 勢津子・柴田 京子

Learning through Simulated Childcare Based on the Division of Roles  
in Childcare Training Guidance II (2)

Motohiro SAKAI / Shitsuko FUJIKAWA / Setsuko ISHIKAWA / Kyoko SHIBATA

キーワード：保育所実習指導、模擬保育、子ども理解、寄り添う、多様性

保育所実習指導Ⅱで実施した模擬保育において、多様な子ども役の設定を通じて得た学生の学び及び、授業の教授方法の検討を目的とした。その結果、一人ひとり背景の異なる子どもたちへの関わり方を体験することにより、多様な主体が学び合う場としての保育所のあり方を考えるきっかけになったと共に、自己を子ども役に投影することで「子ども理解」を深める手立てになったと考えられる。個々のキャラクターに応じた保育者の具体的な関わり方を教授する授業内容については今後の課題である。

## 1 問題と目的

保育所保育指針解説(2018)<sup>1</sup>によれば、保育所の保育士に求められる専門性の一つに、子ども同士の関わりや子どもと保護者の関わりなどを見守り、その気持ちに寄り添いながら適宜必要な援助をしていく関係構築の知識及び技術が掲げられている。保育における「寄り添う」行為について、栗原・佐々木ら(2016)<sup>2</sup>は、「保育者として寄り添うという援助行為の本質においては、子どもが今抱えている教育的課題を捉えていなければならない」と述べており、子どもの姿をありのまま受け止めつつ、援助の方向性を見定める子ども理解が求められている。子ども理解は保育の基盤でありながら、発達過程や遊びの状況、保育者との関係性や環境構成などから子どもの内的世界を推測する力が形成されていなければ、より豊かに理解することはできず、実践経験の乏しい学生にとっては子どもと関わる上で悩みを生じる場面ともなっている。そのため子どもと関わる本質として据えられていても、実際の保育を具体的に想定することが難しい学生は、表現のしやすさから「寄り添う」「見守る」という言葉を短絡的に使用する傾向が見られる。

筆者らはこれまで、保育実習指導において模擬保育における保育者の役割分担を通して得られる学生の学びや教育的効果、科目としての教授方法について捉えてきた(酒井ら2024)<sup>3</sup>。阿部(2016)<sup>4</sup>は保育者養成における実習及び実習指導について、次の通りに述べている。「保育、あるいは人の現象は単線的理解(こうあるべきとか、よかれと思ってするというような)ではその

本質に迫ることが難しいということを理解できるようにと考えられた指導のあり方が「実習」といえる。」つまり、アクティブラーニングの手法をもつ模擬保育は保育実践力の向上を図る上でも効果的な学習方法であると考えられる。模擬保育の実践を考察した先行研究では、保育内容の指導法やオンライン授業でのあり方、実習との関連性、自己・他者評価からなど幅広い見地からの検討がなされ、保育者役・子ども役・観察者役の複数の視点から学生の学びを明らかにしているが、子ども役における学びに焦点を当てたものは少ない（高原ら2014、笠原ら2017、猪田ら2018、杉村ら2018、猪田ら2019、高橋ら2020）。また、その役割も子ども役として一律的にまとめられ、子ども一人ひとりの生活背景や個性を想定した設定には至っていない。倉橋は『育ての心』において子どもの心を知る術として、「一人一人の幼児に対して、一々省察を以て接することを度重ねて、初めて得られるもの」<sup>5</sup>と示している。一人ひとりの思いや個性を土台に、子ども個人の心身の発達段階や生活における経験の差異を把握し関わることこそ、子ども理解の第一歩ではないだろうか。高橋（2023）<sup>6</sup>は子ども理解について、理論的理解と実践的理解があることを示唆しているが、学生にとって子ども役に厚みを持たせた模擬保育は実践的理解を深める場になると言えよう。子どもを取り巻く環境が変容している中で、障害や発達上の課題を持つ子どもに対する保育、不適切な養育等が疑われる家庭への支援、外国籍の家庭といった特別な配慮を必要とする家庭に対する支援など保育ニーズも多様化しており、それに伴う保育者の専門性は高まっている。全国保育士養成協議会による2018年の調査<sup>7</sup>によると、保育士として働く際に学ぶ必要があると思う知識や技術について、障害のある子どもへの支援についての回答が最も高く、続いて、保育や子育てに関する最新の保育事情、食育やアレルギーへの対応が挙げられた他、外国人対応についての回答も得られている。模擬保育を通じて多様な子ども役を演じ、その視点に立つことで榎沢（2018）<sup>8</sup>の述べる、情態感の共有が、感性的に相手を理解している状態、つまり関係論的理解に導かれていくと考えられる。実習に向けた練習の場として模擬保育が機能する以上に、保育そのものの質を向上させる貴重な機会となっていくのではないだろうか。そこで本研究では、模擬保育における多様な子ども役の設定を通じて得た経験により、学生自身がどのような学びを得たのかを検討していくことを目的とする。また、模擬保育の実施に伴う教育的効果を踏まえ、保育所実習指導の教授方法についての検討を行っていく。

## 2 方 法

本研究は、『千葉敬愛短期大学総合子ども学研究所年報（6）』に投稿した「保育所実習指導Ⅱにおける役割分担に基づいた模擬保育を通じた学び（1）」の継続研究として位置付く。

### （1）保育所実習指導Ⅱの授業概要

保育現場での実践経験を有する4名の教員により、授業が展開される。各教員の保育経験はA教員（公立保育園18年勤務）、B教員（公立保育園17年勤務）、C教員（公立保育園13年・私立保育園15年勤務）、D教員（公立保育園30年・私立保育園5年勤務）となる。履修者は89名で、模擬保育に関する演習内容は全15コマ中6回を充当した。前年度は同僚性の育みの観点から学年クラスを混合してクラス編成を行ったが、授業外での打ち合わせや振り返りの時間の担保が課題となったため、今年度は空きコマが同じ学年クラスで配属を行い、4クラスに分かれて受講をしている。

## (2) 模擬保育の授業展開

各授業の具体的な展開は、表1に示した通りとなる。

表1 保育実習指導Ⅱにおける模擬保育の具体的内容

	授業内容
1回目	グループ活動① ・模擬保育の考え方 ・グループの代表者の決定 ・主活動の決定（2歳児クラスを対象年齢に設定） ・備品や準備物の確認
2・3回目	グループ活動② ・指導計画の立て方・作成（役割分担に基づき個々人で作成） ・グループ内の役割分担の決定（リーダー・サブ・フリー） ・主活動に向けた準備（保育教材の制作など）
4・5・6回目	模擬保育の発表（1回で2グループ発表） ・1グループの持ち時間は30分 （主活動20分・片付け5分・振り返りシート記入5分） ・発表グループ以外の学生は子ども・観察者役に交代で担当 （体験後、子ども役は感想を発表、観察者役は振り返りシートに記入）

実際の保育現場を想定し、保育者の役割分担に基づいたチーム保育での体験を通じ、学びを深めていくことを目的に、保育の方法は様々にあること（一斉・興味別・分散など）、子どもの発達や関心を踏まえて計画すること、発表よりも試行錯誤する過程を大切にすることを学習のポイントとして指導した。主活動は「制作あそび」「表現あそび」「運動あそび」の3つのジャンルからクラス内で3つ以上重複しないよう調整し、各グループの人数は5名とした。教員側が学籍番号順に割り当てているため、グループ成員の関係性は緊密であるとは言い難く、クラス編成を考慮したものの、各グループでの話し合いを含めた進捗状況には差が見られ、代表の学生を中心に意見を出し合うグループもあれば、グループメンバーから協力が得られず一部の学生に負荷が掛かり相談を受ける場面もあった。

模擬保育の発表では、保育者役、子ども役、観察者役に分かれて展開したが、今回は子ども理解の見地を深めていくため、SDQ（Strength and Difficulties Questionnaire：子どもの強さと困難さアンケート）<sup>9</sup>を参考に、保育現場の実情と照らし合わせて子ども役のキャラクターを設定した。SDQは子どもの情緒や行動について示した質問項目でメンタルヘルス全般をカバーするスクリーニング尺度として世界各国で用いられている。逆転項目の質問を交えて作成されていることからその信頼性や妥当性も高く、特別支援教育では保護者と保育者がそれぞれ回答することによって、互いの認識の違いを確認する手立てともなっている。子ども役のキャラクター設定は、表2に示した通りで10に分けられる。

表2 子ども役のキャラクターと設定理由

	キャラクター	設定理由
1	眠っているところを起こされ、朝食を食べずに登園して元気のない子	登園時に保護者にしがみついて離れ難い子、泣いてぐずる子はしばしば見受けられる。とくに新年度は慣れない環境によりこうした姿が散見されるが、学生には単に泣いているのではなく、言葉にならない理由があることを慮れるよう設定した。
2	登園時に保護者にバイバイができなかったことで大泣きし、今も不機嫌である子	
3	じっとしていることが苦手で、歩き回ったり廊下に出たりする子	責任実習を行う上で、静かに話を聞かない、参加しない、立ち歩く、いざこざが起こるといった状況は、学生にとって難しさを感じる場面と言える。計画通りに進まない保育場면을体験することで、子どもには一人ひとり思いや理由があることに気づけるよう設定した。
4	好きな遊び（ブロックやお絵描きなど）を続ける子	
5	保育者の話を最後まで聞かないうちに、触ったり、やり始めたりする子	
6	「見て見て」「ねえねえ」と自分に注目してほしい子	
7	座る場所や教材の取り合いをする子	
8	トイレに行きたくなった子	
9	指示通りに行うことが難しく、他児と同じようには参加しない子	多様な背景を抱える子どもが保育現場では増えており、一斉の説明では理解の難しい子がいることを知る目的で設定した。
10	日本語の分からない子（外国籍の子ども）	

子ども役のキャラクターの選出方法は各グループの発表時にくじ引きで行い、保育者役にはどのようなキャラクターであるかを知らせず、模擬保育を行った。

### （3）Google フォームでの質問調査による検証

模擬保育終了後、Google フォームにおける質問調査を元に、「子どもの立場に立って模擬保育を体験する意義」「子ども理解についての気づきと学び」について分析・検討を行った。

#### ①質問紙調査の目的

保育所実習指導Ⅱで実施した模擬保育において、多様な子ども役を演じることにより、子どもの捉え方や保育者の専門性に対してどのような気づきや学びがあったのか、実践的理解を深める教授内容であったかを検討することを目的とする。

#### ②調査対象者及び調査時期

2024年保育所実習Ⅱを履修した89名を対象に、模擬保育終了後Google フォームにて実施する。敬愛短期大学研究倫理規程第7条の規定に基づき「人を対象とする研究に関する計画書」の提出及び承認を受けて実施し、調査結果については、今後の授業改善及び研究論文作成に活用され、協力できない場合においても学業等に不利益を被ることがないこと、匿名での実施及び統計的に処理がなされるため個人が特定されないことを伝え、同意を得ている。回答率は67名（回答率75%）が回答し、全ての回答が有効となっている。



### ③分析対象となる質問項目

「子どもの立場に立って模擬保育を体験する意義」「子ども理解についての気づきと学び」について検討を行うため、以下の質問項目を対象とした。

- ・キャラクター設定のある子ども役を演じたことでの感想を自由に書いてください。
- ・子ども役を演じた皆さんの行動や気持ちが変わるきっかけとなった、保育者の具体的な働きかけ（行動や言葉）を書いてください。

### ④分析方法

得られた回答は思い込みや操作に左右されないよう、保育現場での実践経験のある教員4名によって、データに対する共通の見解が得られるまで内容を検討し、協議を重ねて整理を行った。「キャラクター設定のある子ども役を演じたことでの感想を自由に書いてください」については、室田(2018)<sup>10</sup>が示した子ども理解の2つの側面を参考に、「知ること」「分かること」を柱とし、「知ること」は子ども役を演じることでの感想の意を、「分かること」は子どもと保育者それぞれの視点からの気づきとして分類を行った。「子ども役を演じた皆さんの行動や気持ちが変わるきっかけとなった、保育者の具体的な働きかけ（行動や言葉）を書いてください」については、遠藤(2014)<sup>11</sup>による保育者の言葉がけの分類（肯定・反復・質問・同調・言語化・誘導・提案）、小西由紀子(2015)<sup>12</sup>による保育者の関わりの分類（沿う・認める・確認する・共に活動する・モデルを示す・説明する・指示する・その他）を参考に分類を行った。分類に際し、複数の意味合いが書かれている場合は、文章の中で似たような単語がどの程度使用しているのかを確認し合い、上位になる項目に分類した。

## 3 結 果

### （１）キャラクター設定のある子ども役を演じて得た学び

キャラクター設定のある子ども役を演じたことについて、回答を分類したものが表3となる。

表3 キャラクター設定のある子ども役を演じたことについての回答と分類（n=65）

子ども役を演じて得た学び	代表的な回答
子ども役を演じることで知った難しさ	<ul style="list-style-type: none"><li>・キャラクターを演じるのがとても難しかった。</li><li>・どう表現したらいいか難しかった。</li><li>・友だちとも保育者役とも話さず、じっとしていることを演じることができた。</li><li>・活動の進み具合を気にせず2歳児として、場所や物の取り合いの演技に集中した。</li><li>・実際に見たことがあるキャラクターだったのでうまく演じることができたと思う。</li><li>・好きな遊びを続ける子を演じたが保育者役に伝わらず難しかった。</li><li>・どう表現したらいいのか分からず、戸惑いが大きかった。</li><li>・2歳児の子どもになりきって演じるのが難しかった。</li><li>・どのように演じていいのか分からず、黙っていることしかできなかった。</li><li>・日本語が分からないので周囲の様子を見ながら少し遅れて行動した。</li></ul>

自己投影で得られた子ども理解への気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育者役の人にしっかり対応してもらえて嬉しかった。</li> <li>・実際にキャラクターを演じることで、子どもの気持ちが少しわかった気がする。</li> <li>・日本語が分からず、保育者の話も分からないのでストレスになり、ついていけず辛いと思った。</li> <li>・遊び続けるのは楽しいからだと思った。</li> <li>・2歳児の姿や何故その行動をするのかを考えながら演じ、2歳児の気持ちになることができた。</li> <li>・保育者役からの反応がなかったり見てくれないと悲しい。</li> <li>・実際に演じると恥ずかしかったが、子どもの気持ちが理解できた。</li> <li>・遠慮があり2歳児の表現はできなかったが、実際多いキャラクターだと思った。</li> <li>・自分の気持ちに保育者役が気づき認めてくれたことが嬉しくて喜びを感じ、子どもの気持ちが分かった気がした。</li> </ul>
演じることで得られた保育者としての気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際の現場でも様々なキャラクターの子どもがいるので、丁寧に対応していく必要があると思った。</li> <li>・実際の実習の際に同じキャラクターの子どもがいたので、このような対応の仕方もあるということを知ることができた。</li> <li>・勝手にトイレに行く行動に対し、保育者役が声かけも行動も迷わずに対応してくれたので、安心できた。</li> <li>・難しかったが、自分が対応する時の関わり方を学ぶことができた。</li> <li>・2歳児はトイレに行くと言えない子もいると思うので保育者が随時声かけする必要があると思った。</li> <li>・保育者のどのような対応によって、子どもが安心できるのかを実感することができた。</li> <li>・キャラクターを演じることで、子どもの気持ちに寄り添い、興味を持てる言葉がけや傍について安心できるようにするなどの援助や関わりをする保育者の素晴らしさを感じることができた。</li> </ul>

有効回答と判断した自由記述は65であり、「子ども役を演じることで知った難しさ」(29%)、「自己投影で得られた子ども理解への気づき」(26%)、「演じることで得られた保育者としての気づき」(45%)の3つの学びに分類され、その割合を図1に示した。キャラクター設定のある子ども役を演じることで、保育者に期待される具体的な援助や姿勢に気づいたと回答した学生が最も多い結果であった。

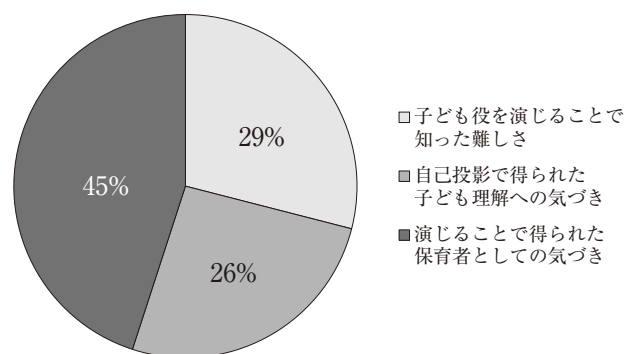


図1 キャラクター設定のある子ども役を演じて得た学び (n=65)

## (2) 子どもの行動変容のきっかけとなる保育者の関わり

子ども役の学生が保育者役のどのような関わりで行動が変容したか、その解答を分類したものが表4となる。

表4 子どもの行動変容のきっかけとなる保育者役の関わりについての回答と分類 (n=66)

保育者役の関わり	代表的な回答
安心できる関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語が分からない役をやった時に、ジェスチャーで教えてくれたりして分かりやすくしてくれた。</li> <li>・勝手に廊下に出て行ってしまう役で廊下に出ようとした時に、すぐに話しかけてきてくれて、自分のことをちゃんと見てくれているのだと安心した。</li> <li>・「トイレに行きたいよ」と言ったときにリーダーとフリーの先生で分担してすぐに対応しに来てくれた。</li> <li>・笑顔で話しかけてくれた。</li> </ul>
興味を引く関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好きな遊びを続ける子を演じ、「そっか、これが好きなんだね」と気持ちに共感しつつ、「これも楽しいからやってみる?」と子どもの興味を引き立たせる言葉がよかった。</li> <li>・みんなとっても楽しそうだよ、1回先生と一緒にやってみる?</li> <li>・「見て見て〇〇先生とても楽しそうなことしてる〜!」と言い、子どもが興味を持てるようにしていた。</li> <li>・気持ちに寄り添い安心する言葉や、「〇〇やってみる?楽しそうだね」など活動に興味を持てる言葉がけをして気持ちを切り替える援助をしてくれた。</li> </ul>
共感する関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育者と目が合ったとき「楽しいね」と声をかけてくれたので素直に楽しめた。</li> <li>・物の取り合いの時、気持ちを受け止めてくれて、「こっちが良かったよね」と共感する言葉をかけてくれた。</li> <li>・子どもの気持ちを改めて保育者役が代弁してくれた。</li> <li>・「今は、遊びたくないんだね」と受け止めてくれた。</li> </ul>
肯定的な関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「すごいね!」「上手だね!」。</li> <li>・「上手だね」「なりきれているよ」「きれいにできたね」と言われたら、とても嬉しい気持ちになった。</li> <li>・制作など名前を呼んでくれて具体的に褒められると、とてもうれしくなった。</li> <li>・子どもの発言を認め、肯定的な言葉がけから安心して保育者を頼ることができた。</li> </ul>
励ましの関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もう少しだけ頑張ろう!</li> </ul>

有効回答と判断した自由記述は66であり、「安心できる関わり」(51%)、「興味を引く関わり」(21%)、「共感する関わり」(16%)、「肯定的な関わり」(11%)、「励ましの関わり」(1%)の5つの対応に分類され、その割合を図2に示した。

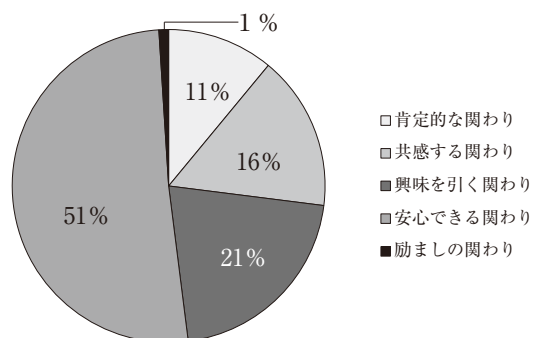


図2 子どもの行動変容のきっかけとなる保育者役の関わり (n=66)

表2、図2より、「分からないときにジェスチャーで教えてくれた」「自分のことをちゃんと見てくれる」「すぐに対応してくれた」「笑顔で話しかけてくれた」などに表されているように、実際に子ども役の行動を近くで見守り一緒にいてくれる【安心できる関わり】を保育者に求めていることが明らかになった。次いで、「これが好きなんだね、これもやってみる?」「みんな楽しそうだよ、先生と一緒にやってみる?」「見て見て…」などの子どもの視点に立った【興味を引く関わり】や、「目が合ったときに楽しいねと声をかけてくれた」「気持ちを言ってくれた」「気持ちを受け止めてくれた」などの自分の気持ちを代弁してくれる【共感する関わり】、そして、キャラクターのある役柄を演じた際に自身（子ども）の行動を具体的に褒めてくれて嬉しかったに示される【肯定的な関わり】が行動変容のきっかけとなっていた。いずれの関わりも、集団から逸脱している行動とは判断せずに、子どもの行動には意味があると考え受け止める姿勢を保育者がとることで、子どもの行動変容の契機になったと考え得る結果となった。また、少数ではあるが【励ましの関わり】も確認された。

以上から、多様なキャラクター設定のある子ども役を演じ、保育者役となった学生から一人ひとりに応じた関わりを得ることで、子どもの心の世界に少しだけ近づくことが可能となり、保育者に求められる援助についての理解にも繋がったことが推察される。

#### 4 考 察

今回は、酒井ら（2024）が明らかにした模擬保育の有効性を更に保育現場の実際に近づけるため、学生自身が多様な子ども役を演じることを新たに取り入れた。その結果、学生が「保育を受ける」「保育を行う」の双方の立場から経験することにより、関わり方や言葉かけがより具体化し、子どもを真に理解しようとする一助になったと考えられる。文部科学省中央教育審議会は令和の日本型学校教育として、「多様な子供一人一人の資質・能力の育成に向けた個別最適な学びを実現する」<sup>13</sup>ことを目指しているが、こうした多様性を尊重する関わりは就学前教育の場でも当てはまり、近年多様性を尊重する保育のあり方が求められている。

厚生労働省の調査（2022）<sup>14</sup>によると、図3に示した通り、障害のある子どもの受け入れは年々増加傾向にあり、令和6年からは障害者差別解消法に基づく基本方針の改定によって、障害のある人への「合理的配慮の提供」が公私問わず、全ての保育所及び幼稚園等において義務化されている。

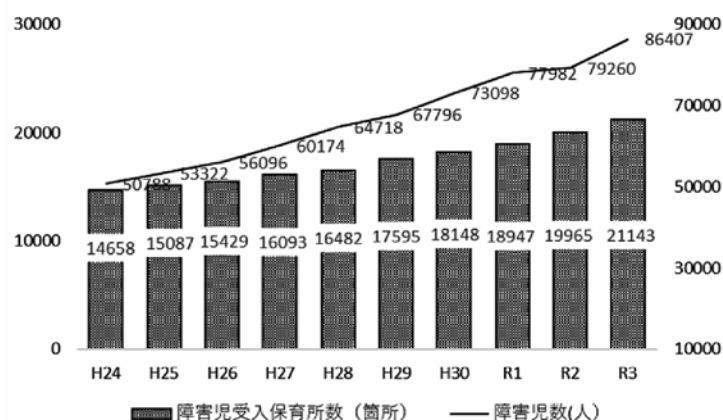


図3 障害児受け入れ保育所数とその人数の推移



また、国立社会保障・人口問題研究所発行の「人口統計資料集2023改訂版」<sup>15</sup>によれば、外国籍の年少人口（0－14歳）と年少人口に占める外国籍の子どもの割合もまた増加傾向にあり、子ども家庭庁の「外国籍の子どもへの保育に関する調査研究」<sup>16</sup>では、図4に示した通り、外国籍等の子どもが入園していると回答した保育所は7割弱という報告もなされている。

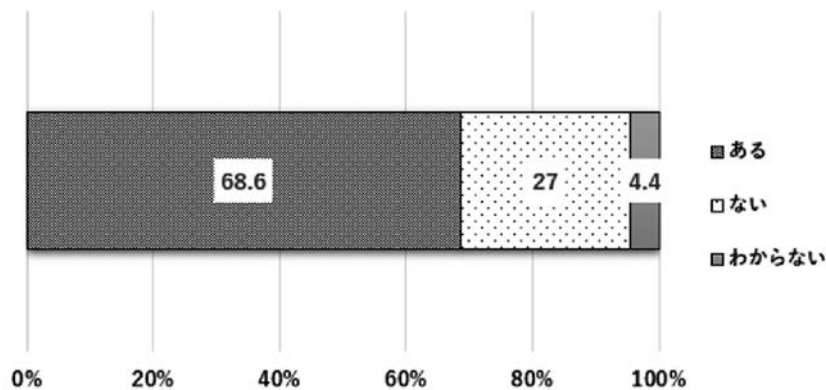


図4 外国籍等の子どもが入園している保育所（n=1,139）

こうした背景に加え、ベネッセ教育総合研究所による「乳幼児の生活と育ちに関する調査」<sup>17</sup>では、外遊びや絵本や本を読む時間の減少のほか、子どもが使いたがるからという理由からスマートフォンやタブレット端末が利用されているなど、家庭内においても時間、空間、仲間といった要素も変化し、子どもたちは多様な背景の中を生きることが読み取れる。

これらの現状を踏まえ、一人ひとり背景の異なる子どもたちへの関わり方を養成校時代に体験することは、保育を目指す学生にとって必要な学びとなるのではないだろうか。今回の模擬保育を通じて得た体験は、多様な主体が学び合う場として保育所があることを、より身近に感じ、考える貴重な機会になったと考えられる。模擬保育での学びにおいて、保育者同士の連携を意識して保育を行うことは勿論のこと、大人が予測できない行動を示す子どもの姿から、その行動の意味を考えることは非常に有用である。将来子どもの前に立つ上で、こうした現状を理解し、子どもの最善の利益を考慮する関わり方を考えていくことこそ、専門性のある保育者としての礎になっていくと考える。

子どもの行動の意味を考えるきっかけとして模擬保育を通じ、キャラクター設定のある子ども役を演じたことは、学生にとって大きな学びとなったと言えよう。今回の自由記述では確認されていないものの、授業内で「子ども理解」を取り上げると、学生からは「寄り添う」「見守る」という言葉が多く挙がる。河邊（2001）<sup>18</sup>は、「保育者が子どもを理解するとは理解そのものが目的ではなく、保育の当事者として理解に基づいて『子どもとのかかわる』ことが求められている」と述べている。この視点で考えると、子どもを理解するとは、その行為を糸口として、適切に関わりたいという保育者の眼差しや姿勢ということと考えられる。つまり、子どもの言動からその行動の意味を考え、自身が考えた「理解」に基づいて積極的な関わりを持つことに他ならない。「寄り添う」「見守る」という行為は、一見して、消極的な関わりと判断されてしまうが、理解に基づく判断での行為であれば、広い意味で保育現場において必要となる関わりと言えるので

あり、学生は子ども理解のための視点を新たに気づき得たのではないだろうか。

結果の（１）キャラクター設定のある子ども役を演じて得た学びでは、【自己投影で得られた子ども理解への気づき】として「実際にキャラクターを演じることで、子どもの気持ちが少し変わった気がする」といった、子ども理解の記述が確認されている。鯨岡（2004）<sup>19</sup>は、「子どもの気持ちが分かる、子どもの思いが分かるというときは、自分を子どもに重ねて子どもの目になってその場面を見る」ことと述べており、更にその行為は「より子どもの思いに目を向けていきやすいのではないか」とも述べている。単なる子ども役ではなく、子ども一人ひとりの生活背景や個性に焦点を当てて演じたことで、子ども理解をより深化させる手がかりとなったのではないだろうか。

## 5 今後の課題

今回、模擬保育の内容として、近年インクルーシブ保育の視点からも重要とされている、多様な子どもたちを保育するという視点を持つことを意識できるよう、子ども役のキャラクターを意図的に設定した。限られた時間の中ではあったが、学生が実際に割り当てられた子ども役のキャラクターを演じることで、自己を子ども役に投影して「子ども理解」をしようとする意識の表れや、保育者役の友人の関わり方に「安心」する気持ちが持てたなどの心理的な変容を示す多くの記述が質問調査の分析結果から得られた。短期大学の最終学年での模擬保育の内容として、子ども理解に繋がる多くの気づきと具体的な行動レベルでの関わり方の手立てが得られた意義は大きいと考える。

保育を展開する上で、子ども理解のために子どもの姿をありのままに受け止め「行動の意味」を推測する姿勢を示すことは、保育者としての基本と考える。この姿勢は、どの子どもにも等しく必要な姿勢ではあるが、一見して逸脱したと思われる今回のような特性を持つ子どもにとっては特に必要となる姿勢になっていくのではないだろうか。今回の自由記述の分析では、各子ども役のキャラクターに応じた保育者の具体的な働きかけには至らなかった。その点において、今回の結果の処理について精度が低いことは否めない。今後の課題として、初任者である学生が子どもとの関わりの手立ての一つとして、それぞれのキャラクターに応じた対応を具体的に整理していく必要があると考える。

子どもへの関わり方は常に一定ではなく、この行動にはこの対応が良いと限定できるものではない。しかし、関わり方に迷いが生じた時に、単に「寄り添う」という言葉のみが独り歩きしてしまったり具体的な行動を起こせず、傍観してしまうことを防ぐ手立てに、今回の模擬保育での体験がなり得るのではないかと考える。保育者養成校の教員として、保育の初任者への関わりのきっかけを整理して伝えることの必要性がある一方で、子ども理解の基本となる先人の考えも伝えていく必要性も欠かせない視点である。津守（1987）<sup>17</sup>は、長年、障がいを持つ子どもとの関わりを持つなかで、子どもを理解することを「子どもを理解することは科学的研究の結果を当てはめる説明とは異なり、子どもと親しく交わる人によって発見される」と述べている。更に「子どもが示す現象はきわめて多様なので、子どもの世界をきわめつくすことは不可能である」とも述べている。子どもが示す姿は一回性を特色とし、同じ場面であっても一回ごとに多様で具体的な姿を示している。保育者は一回性と普遍性の緊張の中で、どのように子どもに関わりを持っていくかとい

う実践と思案を続けることを積み重ねることで、子ども理解は深められると言えるのではないだろうか。その点を根幹とし丁寧に学生に教授していくことが、保育者養成校における教員に求められる要件の一つであり、今回の模擬保育を通じて、保育所実習指導の教授方法の要点になり得ると考えている。

#### 引用文献

- 1 厚生労働省『保育所保育指針解説』フレーベル館、2018
- 2 栗原ひとみ・佐々木宏之「保育者の寄り添う技術を可視化する：5歳児M児（女児）が仲間に入れてもらえない場面事例から」『保育の実践と研究 21』、2016
- 3 酒井基宏・藤川志つ子・石川勢津子・柴田京子「保育所実習指導Ⅱにおける役割分担に基づいた模擬保育を通した学び（1）」『千葉敬愛短期大学総合子ども学研究所年報（6）』、2024
- 4 阿部和子「第12章実習—保育者養成の現状とこれから3」『保育学講座 4 保育者を生きる—専門性と養成』東京大学出版会、2016
- 5 倉橋惣三『育ての心（下）』フレーベル館、2008
- 6 高橋真由美「保育者養成校に在籍する学生の「子ども理解」に関する学び」『子ども発達臨床研究（18）』、2023
- 7 一般社団法人全国保育士養成協議会『保育士試験合格者の就職状況等に関する調査研究』、2018（<https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000588991.pdf>、2025年1月5日閲覧）
- 8 榎沢良彦『幼児教育と対話—子どもとともに生きる遊びの世界—』岩波書店、2018
- 9 神尾陽子クリニック『SDQ 子どもの強さと困難さアンケート』、2019（<https://ddclinic.jp/SDQ/index.html>、2024年1月14日閲覧）
- 10 室田一樹「第3章 子どもの思いや育ちを理解する仕事」汐見稔幸・大豆生田啓友編『保育者論』ミネルヴァ書房、2018
- 11 遠藤晶「身体表現遊びにおける保育者と幼児の相互作用を高める指導—保育者の「言葉がけ」に着目して—」『教育学研究論集（9）』、2014
- 12 小西由紀子「保育者の子どもへのかかわりのカテゴリーの一考察—保育のプロセスの可視化の試み—」『大阪総合保育大学紀要（10）』、2015
- 13 文部科学省『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（中教審第228号）』、2021（[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985\\_00002.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm)、2024年1月14日閲覧）
- 14 厚生労働省『今後の仕事と育児・介護の両立支援に関する研究会（第4回）』、2020（<https://www.mhlw.go.jp/content/11901000/001074704.pdf>、2025年3月23日閲覧）
- 15 国立社会保障・人口問題研究所『日本の将来推計人口 報告書資料第347号』、2023
- 16 こども家庭庁『令和2年度「外国籍等の子どもへの保育に関する調査研究」（実施主体 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社）』（<https://www.cfa.go.jp/policies/hoiku/gaikokuseki-chousa/>、2024年1月14日閲覧）
- 17 ベネッセ教育総合研究所『乳幼児の生活と育ちに関する調査 2017-2022』（[https://benesse.jp/berd/up\\_images/research/2017\\_2022\\_Nyuyouji.pdf](https://benesse.jp/berd/up_images/research/2017_2022_Nyuyouji.pdf)、2024年1月14日閲覧）
- 18 河邊貴子「第3章 子どもを知る」青木久子・河邊貴子・間藤侑『子ども理解とカウンセリングマインド—保育臨床の視点から—』萌文書林、2001
- 19 鯨岡峻・鯨岡和子『よくわかる 保育の心理学』ミネルヴァ書房、2004